

草の芽句会だより

NO,162
22,2,

北京五輪はなしの弾む炬燵かな
訪へばマスクの笑顔春近し

貞子

はと庭に来てさがしおり鬼の豆
買い物に夫を誘うて冬帽子

範子

立春の散歩の道を変へてみし
読み返す「藤沢周平」日向ぼこ

禮子

薄ら氷のさわれば小さくこわれけり
菜花摘む日射しうれしき昼下がり

節子

水鳥の中州に並び水温む
寒椿ひっそりと咲き落ちにけり

文子

ちらちらと雪舞う夕べ門を閉ず
川べりを歩けば冬の空やさし

芳子

人まばら寒明の寺花手水
窓越しの面会五分春の雨

純子

水仙の吹かるるままに札所径
山茶花の紅散り敷ける通学路

剋子



コロナが収まらない。香川県では毎日に感染者が増えるばかり。できる限り外出は控えなければと、二月句会は投句のみとなった。「私達は高齢者やから気をつけんとイカン」「家族に迷惑をかけたらイカン」「家でじっとしとらんとイカン」吉崎さんからの電話である。しばらくの間我慢して籠っていることにしよう。

立春が過ぎても寒さは相変わらずである。炬燵でテレビの毎日、北京五輪では吹雪の中をジャンパーたちが飛んでいる。現場はマイナス二十度とか。メダルを目指しての厳しい練習の話を聞きテレビの前で思わず拍手をしよう。そしてインタビューではどの選手からも支えてくれた周囲の人達への感謝の言葉が聞かれる。心温まる場面である。オリンピック選手には比べるべくもないが、私達は周囲に感謝することを忘れていたのでは。ふと、そんなことを考えた。草の芽がここまで続いてきたのは仲間のお陰、感謝である。オリンピックはこんなことを気付かせてくれた。